

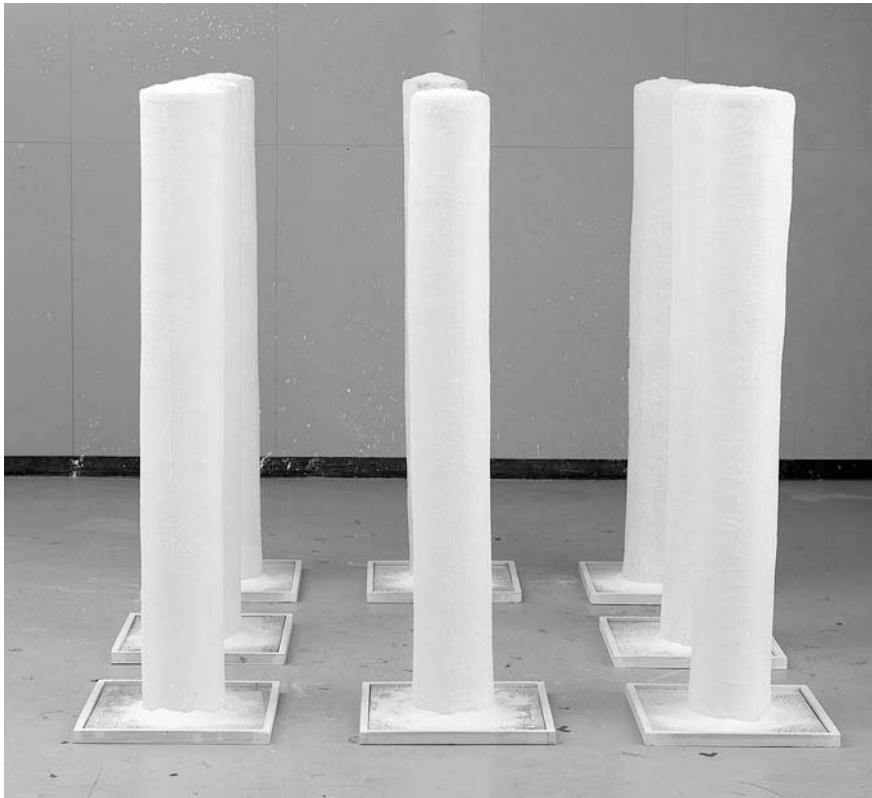


安森大樹 《Memory — 蝋と塩》 ワックス、塩 2000 × 3500 × 3500 mm

《Memory — 蠟と塩》
「もの派」の自然観を手がかりとした
記憶の立体表現
《Memory — Wax and Salt》
A Study of the Volumetric Representation of the “memory”
Based on the View of Nature of “Mono-ha”

安森 大樹
Daiki YASUMORI

崇城大学大学院芸術研究科美術専攻
Division of Fine Art, Graduate School of Art, Sojo University



《Memory — 蠟と塩》
ワックス、塩 2000 × 3500 × 3500 mm

本稿は、彫刻（立体表現）においては重要なことである作品を構成する素材を選択していく中で、素材が持つ魅力や素材が創り出す世界に惹かれるようになった稿者が、自身の素材に対する考え方に影響を与えた「もの派」の自然観と、稿者が大学院でたびたび作品の題材としている「記憶」の表現の双方から、素材に対して感覚的に抱いている概念や定義を再検証し、より明確化し、修了研究作品を制作するに際しての構想や、構想するに至った動機や経緯、また、作品の制作過程について述べたものである。

第1章の研究テーマ、「1. 素材について考察するようになった経緯」では、稿者が、素材の持つ自然性にコンセプトが寄り添うような表現が出来ないかと考えるようになったきっかけや経緯について述べた。次いで「2. 「もの派」の動向」では、稿者の素材に対する考え方に影響を与えた「もの派」の考え方や主要な作家の作風などを紹介し、「3. 稿者の素材に対する考察」では、先に述べた「もの派」の自然観を手掛かりとして、稿者が素材に対して感覚的に抱いてきた概念について考察し直した。

次いで第2章の作品の構想では、「1. 「記憶」について考察する動機」と、「2. 記憶を題材とした稿者の過去の作品」において、改めて、「記憶」を修了制作の検証課題とした動機と、同じ題材を扱った稿者の作品表現の変化について述べた。続いて「3. 本作品《memory 一 蠟と塩》の構想」、「4. 「蠟」、「5. 「塩」」では、記憶を題材とした本修了研究作品を構想するに至った理由と、「蠟」と「塩」がそれぞれどのように記憶と関係しているのかについて述べた。

第3章の制作過程では、作品を立体化する過程を、原型づくり、石膏取り、蠟の塗りこみ、蠟作品の仕上げ、台座制作、設置の順で述べた。

そして第4章の結論と反省、今後の展望では、本修了研究の制作全体を通しての結論や反省、発見したこと、並びに今後の作品制作で取り入れていきたいことについて述べた。